HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本聖公会所属の二棟の教会建築について ： 北海道のキリスト教会と教会建築(その3)
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 24, 27-32
Issue Date	1989-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46474
Type	journal article
File Information	24_27-32.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

日本聖公会所属の二棟の教会建築について

―北海道のキリスト教会と教会建築（その三）―

川島洋一

〈はじめに〉

本稿はキリスト教の伝道によって生み出される教会建築の形態的な視点により、建設する側の教会組織との関連をもたせながら、建築そのものの形態的変遷について考察することを目的とする。

今回[1]はプロテスタント教会でもより定形化された礼拝形式を保つ聖公会に所属する教会建築について、二棟を対象として若干の考察をする。

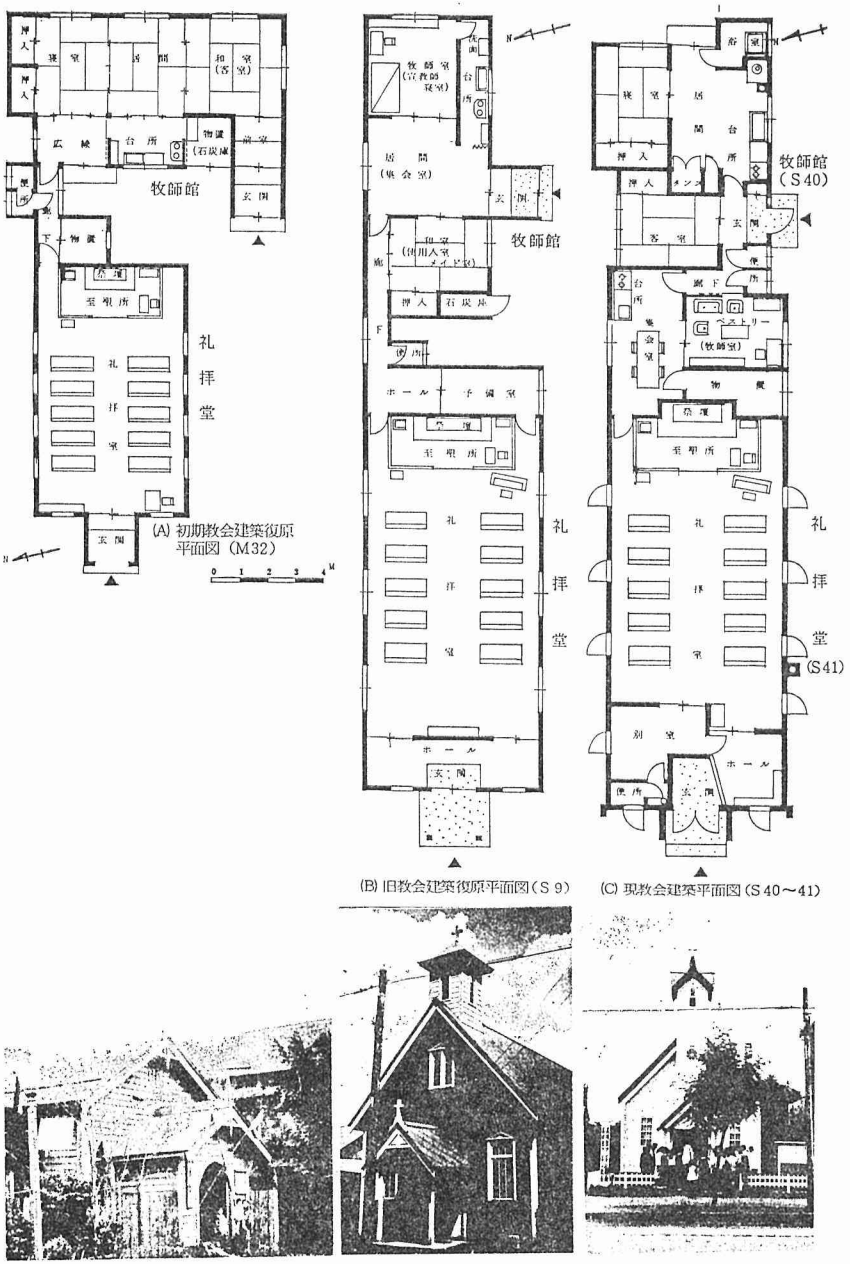
一、日本聖公会の北海道伝道

明治元年に英国聖公会が組織する宣教協会によって宣教師が日本に派遣された事により伝道が開始され、同七年には蝦夷地函館での伝道を決定した事が北海道における聖公会の活動の最初である。W・デニング宣教師が来道し講義所を開設し、同十一年には函館聖公会として木造の会堂を建て同派の教会建築建設行為が始まった。その後道南、道東に及び同二十六には札幌聖公会設立、翌年会堂建設へと進んだ。

当時、日本では米国聖公会も伝道を開始していたが、同十六年には伝道地域の調節が行なわれ、中央（東京・大阪等）と北部地域を担当し、英国は南部、西部及び北海道を担当する事となり、ここに北海道伝道が英国聖公会によって精力的に行なわれる結果となった。同二十年には全国的な組織として日本聖公会が設立された。

二、美唄聖アンデレ教会と教会建築

〔教会創立と会堂建設〕道央に位置する美唄市は明治二十四年から四期に渡り四百戸の屯田入植により本格的な町造りが行なわれ、同二十八年には聖公会信徒が移住し、ニベン宣教師をむかえて美唄聖公会が創立して同教会の誕生となり、同二十八年には初期会堂を建設して明治時代後期よりの石炭産業の繁栄による人口増と共に伝道が活発化した。炭鉱労働者への伝道という特色を持ち



図—1　日本聖公会美唄聖アンデレ教会の教会建築変遷図と外観写真（復原図含）

ながら、大正時代を経て、昭和八年には老朽化と手狭になった初期会堂を移転新築して新しい出発となったが、同十年頃よりの軍部の台頭、十三年の美唄大火、戦争を経て戦後をむかえた。

同二十年代はキリスト教ブームに乗り、青年会、日曜学校も活発化したが、同三十年代よりの炭鉱閉鎖という状況により多くの信徒は美唄を離れたが、少数ながらも伝道は進展し、牧師館改築（四十年）、会堂改築（四十一年）によって新たな教会形成へと進んでいる。

〔教会建築の変遷〕　初期会堂から今日まで三回の建設行為がなされたが、図1は歴史の中で示された三棟の教会建築の復原、現状図である。

初期の教会建築――明治三十二年、伝道師小山垣次郎が建主となって会堂と牧師館が同時に建設されたが、資料不足で不明な点が多いが、聞き取り調査[2]と古写真によると木造平家で両棟は渡り廊下で連結された直列配置であった。会堂は切妻屋根妻入で内部正面に祭壇が配置された対面形式の平面形であり、牧師館は切妻屋根平入の別棟として建設した。建設費の七割は英国の有志献金でミッション依存型で完成した。

旧会堂――初期会堂と土地を売却し、それを建設費として郊外に土地を求めて建てられた会堂と牧師館である。坂東満吉棟梁によって昭和九年完成したが、平面計画等は当時の牧師と信徒北野幸夫によって考えられた。

両棟配置は初期会堂と同じで直列配置、対面形式であったが、特徴としては外観正面形であり棟高切妻屋根上に方形屋根の塔屋を置き、壁面の上げ下げ窓縦長の開口部形態等に洋風手法が見られ、西洋文化を美唄の町にもたらした建物といえよう。

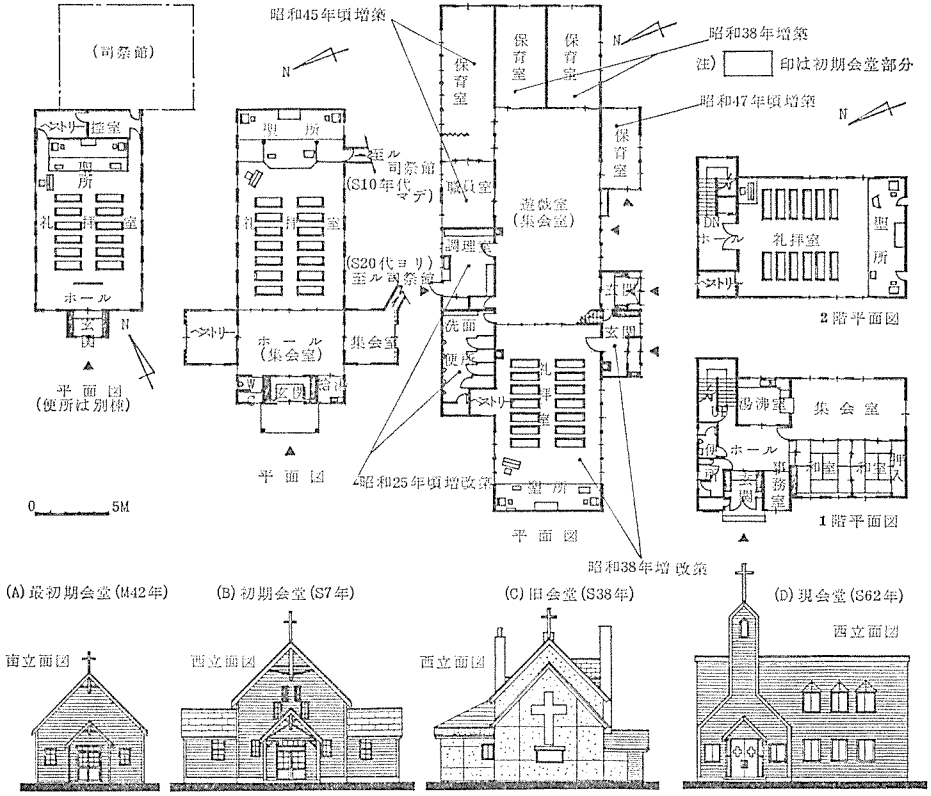
現会堂――昭和四十年の改築は会堂正面部分及び牧師館部分であり、前者では各集会・活動の場が与えられ、後者では寒冷地に適合させた住宅建築となった。会堂外観は四方に広がる小さな切妻屋根をもつ塔屋を上昇させて教会の所在を強調し、窓上部曲線の装飾等は内部機能の充実化と共に外観デザインを意匠した教会建築になり、計画は旧会堂に関与した北野幸夫等により成された。

三、旭川聖マルコ教会と教会建設

〔教会創立と会堂建設〕　組合、日基教会に続き明治二十八年室蘭より鯨岡寅吉伝道師が旭川北部の永山に移住して聖公会の集会を持った事が聖マルコ教会の出発であ

った。同三十年には旭川の町中で集会を開き三十三年には伝道所を建てて本格的な伝道へと進んだが、当時、旭川に設置された陸軍第七師団の関係で多くの人々が移住して人口が増大した事もあって伝道も活発化し、同四十二年には最初期会堂建設、アイヌ民族への伝道も展開した。大正十一年には自給教会、同十二年には Walsh, G. J. 司祭が当教会で道内を管理する本拠地とし昭和三年までは北海道での聖公会伝道の中心教会となった。その後昭和七年には初期会堂を建設し、戦後の昭和二十四年以降は保育所併設と伴なって各所の改築、増築が成され同三十八年には礼拝室を増築して教会建築と保育所建築として用いられたが、現会堂建設のために昭和六十二年に解体された。

〔教会建築の変遷〕　四棟の教会建



図—2　日本聖公会旭川聖マルコ教会の教会建築変遷図（復原図含）

築の復原図と現状図を図2に示すが、各時代の建築内容が読みとれる。

最初期会堂――明治四十二年以前の講義所建築については不明であるが、この建物については聞き取り調査にて復原図を作成した。これによると木造平家切妻屋根で、礼拝室のみの教会建築であるが、美唄聖アンデレ教会と同様に牧師館が別棟に配置されていた。礼拝形式は対面形式であり外観正面形は妻壁を見せる簡素なものであった。

初期会堂――昭和七年に最初期会堂解体材を用いて棟高の木造平家切妻屋根の会堂を建設したが、前会堂前面に集会室、ホール等を増築し左右に広げた全体的には十字形の平面となり一つの特徴となった。外観正面は妻壁を高く持ち上げ、上部に斜材を利用した装飾（玄関棟も同様）を見せ、棟上には十字架を置いて視点を上昇させた意匠となっていた。

旧会堂――戦後の保育所開設は初期会堂の面影を残さない程に四方に渡って各部屋が増築され、昭和三十八年に新しい礼拝室を増築して変遷を終えたが、この状態時の建物を旧会堂とする。平面的には先の十字形がくずれたが、保育所併設のため教会活動としては多くの集会室（保育室）が置かれ機能的にはなった。道路に面する正面形も同様に大きく変化し教会建築としての主張は薄らいだ。

現会堂――木造二階建片流れの現建物は非対象に塔屋を上昇させ、二階に礼拝堂を置く、これまでの三棟とは異なった形態を示している。一階玄関に入ると四坪程のホールが特徴で、礼拝出席のための心の準備をするあるいは信徒同志の交流の場として有効な空間である。

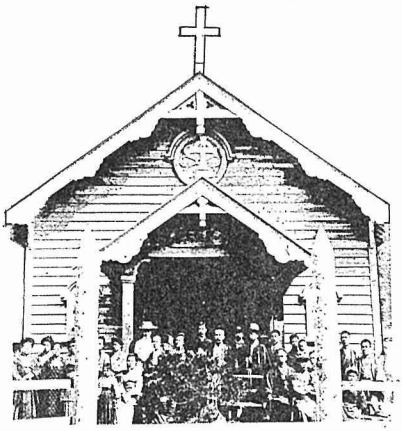
四、聖公会の教会建築への一考察

道央に位置する同年代に誕生した二棟の教会建築の変遷を述べたが、この両棟の形態的特徴と類似性、あるいは他教派における教会建築の変遷と関連性について若干の考察をする。

二棟に視点を置くと、立地的には炭鉱、師団という社会性を背後に持ちながらの活動であったが特に旭川でのアイヌ伝道は聖公会作動の特色として歴史に残っているが、建物に直接的影響はみられないが聖マルコ教会での建設行為に間接的関与があったと考えられる。

建築としては両棟共に礼拝室のみの会堂から出発し、その後教会としての種々な活動空間を整えてより機能

写真—1　日本聖公会札幌教会
外観（M 31～T 6）



写真—2　日本聖公会厚岸教会外観
（M 39～S 63）

的建築を目ざしたが、注目される点は常に別棟の牧師館を備えた点は、他教派と比べると一つの特徴といえる。また形態的には平面形では単廊式対面形式で他派とも類似するが、特に聖マルコ教会にみられたラテン十字形採用は解体材使用による前会堂形態そのままの移築であった事を考えると左右への棟配置は敷地形状に影響されたものか、あるいはトランセプトを持つバシリカ式教会建築を意識したのかは定かではないが、平面形変遷の大きな特徴といえよう。更に外観正面形においては、聖アンデレ教会は札幌聖公会の会堂〈写真1〉（明治後期）、聖マルコ教会は厚岸聖公会〈写真2〉（明治三十九年）のそれに類似し、恐らく建設時での活動に両教会のつながりがあったと考えられる。

道内のプロテスタント教会の他教派、日基、旧メソジスト、旧組合教会の教会建築にも、形態上での教会同志の影響性が若干みられた事を考えると、聖公会においても同様な変遷をしてきた事が想像される。

註

(1) 「基督教学」一七号にて（その一）、同二一号にて（その二）を発表したが、本稿はこの二編に続くものである。

(2) 調査対象者は大正四年から今日まで聖アンデレ教会の信徒としている歯科医で、特に旧会堂建設時には設計に深く関与した。

（付記） 本稿は昭和六十二年、六十三年の日本建築学会大会にて発表、講演梗概集に収められた概要二稿を本稿用にまとめ加筆し、考察を加えたものである。